

ブラック・クリスマス：日本軍による香港占領

天理大学国際学部教授
山本 和行 Kazuyuki Yamamoto

1941年12月8日、アメリカ・イギリスへの宣戦布告をおこなった日本は各方面に戦線を拡大した。すでに1937年からはじめていた「日中戦争」のもと、日本軍は1938年10月には香港にほど近い広州を占領していた。こうした日本軍の香港占領までの状況について、日本占領期の香港に関する先駆的な研究成果である關禮雄『日本占領下の香港』は、以下のよう⁽¹⁾にまとめている。

1941年は、広州が日本の手に落ちてから三年めにあたりますが、香港・広州間の交通は断絶同様であった。／香港からわずか50マイル、珠江河口西岸にあるマカオはポルトガル領であるが、現地では日本の影響力が大であった。幸いにも香港はマカオ及び広東省西南端の広州湾との海上交通は維持していた。が、海上は日本軍の警備艇がパトロールし香港の船隻はほとんど領海から出られなかった。深圳の北は日本の歩哨が巡邏していた(…)第二次大戦の前兆はまだ鮮明ではなかったが状況からみて香港はすでに日本軍に周囲を包囲されていた。

あわせて、「日中戦争」の影響下、「1941年の香港の人口は約170万、四年前まではまだ100万前後にすぎなかった。1937年の上海、南京陥落、一年後の武漢、広州の失陥は香港に流れ込む難民人口の50万増をもたらしたのである。これは香港の手に余る数であった」と指摘されるように、1937年以降、わずか4年ほどのあいだに香港社会は急速に混迷の度合いを深めていた。

ただ、1941年の日本による宣戦布告までは、イギリス政府は「日中戦争」に対して中立的な姿勢を採っていたこともあり、日本政府とイギリス政府ともに、「表面上は香港に対して相互和平を願っていた⁽²⁾」と指摘されるように、1937年以降、わずか4年ほどのあいだに香港社会は急速に混迷の度合いを深めていた。

香港当局は日本に妥協・譲歩し、香港で中国語新聞を検閲し、抗日言論を制限した。また、日本居民には自由放任の姿勢を示し、日本を懐柔して香港が侵略されないよう、イギリスが香港における利益を維持しつづけられるように期待した。そのため、香港の防衛は適切な準備がなされなかった。(港英當局對日妥協讓步，在港檢查中文報刊，限制抗日言論，而對日僑則自由放任，以討好日本，期望香港不受侵犯，期望英國能繼續保持在香港的利益；因此香港的防衛，未做適當的準備。)

ところが、上述したとおり、1941年12月8日の対英米宣戦布告によって、イギリス政府および香港政府のこうした「期待」は打ち砕かれてしまう。宣戦布告当日に、日本軍の戦闘機が香港の啓徳空港を攻撃し、空港内にあった5機の軍用機と8機の民間機を破壊し、さらに攻撃範囲を広げて、九龍半

島地域の軍事拠点や交通インフラを攻撃した。また、すでに日本軍が駐留していた深圳から約6万の兵士が新界地域から九龍半島地域に進軍し、12月12日には新界および九龍半島全域を占領するに至った。この間、イギリス軍はイギリス首相ウィンストン・チャーチルが示した「不服従」の方針にしたがい、撤退しながらの抗戦を続けていたが、12月18日からはじまった九龍半島対岸の香港島への日本軍の進軍を受けて、12月25日午後6時には香港総督マーク・ヤングが日本軍への降伏を宣言した。この間、香港市民も含め、2万人以上が亡くなったといわれている。香港の人々は現在も、この日本へのイギリス降伏の日を捉え、日本による香港占領開始を象徴する一日として、1941年12月25日を「ブラック・クリスマス」と呼んでいる。

その後、12月26日には、日本軍の司令に基づき、マーク・ヤングが白旗を掲げた船に乗って香港島から九龍半島に渡り、日本軍司令部が置かれたペンシラホテルに向かった。そこで、マーク・ヤングは日本軍総司令官の酒井隆に対して正式に投降の通告をおこない、翌27日には日本軍が香港島の占領を果たして、香港全土が日本軍の占領地となった。

この2週間超のあいだ、市民生活は日本軍による略奪行為なども含めて混乱を極め、社会経済活動は完全にストップした。この後、日本軍による占領統治がはじまってからおよそ2カ月ほどのあいだ、まずは社会秩序の回復に向けた動きが進められ、そうした状況と並行して、占領政策および教育制度なども整備が進んでいくこととなった。

圖 勢形界新兼龍九港香

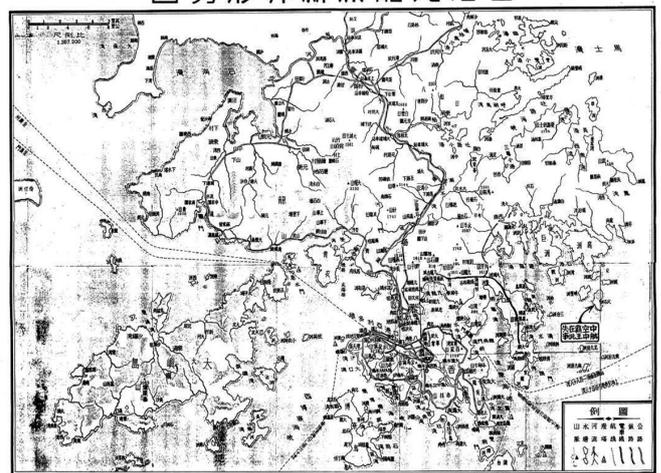


図1 香港九龍兼新界形勢圖(蔡榮芳『香港人之香港史 1841-1945』収録)
[註]

- (1) 關禮雄著、林道生訳、小林英夫解題『日本占領下の香港』、御茶の水書房、1995年、4頁。
- (2) 同上。
- (3) 蔡榮芳『香港人之香港史 1841-1945』、牛津大学出版社、2001年、230頁。
- (4) 同上書、230～231頁。以下、占領の過程についても同書、230～237頁による。